

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 食品生命科学科

職階 教授

氏名 澤野祥子

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

食品生命科学科の機能分野の科目及び食品生命科学科と環境科学科の基礎科目を担当している。カリキュラムツリーの流れの中で、学生に専門知識を着実に定着させることを意識して授業を行っている。実習科目については、実験手技の向上はもちろんのこと、レポート・プレゼンテーションなどの発信力も磨けるようなシラバス作成と授業運営を心掛けている。

| 科目名 | 学科・専攻 | 単位種別 | 配当年次 | 受講者数(単位:人) |
|-------------|------------------|------|------|------------|
| 食物アレルギー論 | 食品生命科学科 | 選択 | 3 | 52 |
| 生化学 | 食品生命科学科 | 必修 | 2 | 47 |
| 生化学 | 環境科学科 | 必修 | 2 | 80 |
| 応用栄養学 | 食品生命科学科 | 選択 | 3 | 42 |
| リサーチローテーション | 食品生命科学科 | 必修 | 2 | 46 |
| 生化学実習 | 食品生命科学科 | 必修 | 2 | 45 |
| 食品学実習 | 食品生命科学科 | 必修 | 2 | 1 |
| 食品開発PBL・同実習 | 食品生命科学科 | 選択 | 2 | 40 |
| 卒業論文 | 食品生命科学科 | 選択 | 3 | 5 |
| 卒業論文 | 食品生命科学科 | 選択 | 4 | 6 |
| 食品健康科学特論 | 環境保健科学専攻（博士前期課程） | 選択 | 1 | 2 |
| 科学者・研究者論 | 環境保健科学専攻（博士前期課程） | 必修 | 1 | 24 |

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

大学教育においては、食品関連の知識を不足なく学生に定着させることを念頭に置き、教育業務に取り組んでいる。例えば、他大学にも自身の担当科目に相当する履修科目があると考えられるが、本学を卒業した学生が他大学の卒業生と比べて遜色のない知識を身につけられるよう、当該科目で一般的に扱われる内容は漏らさず取り上げるとともに、より充実した内容となるよう心掛けている。また、勉強は辛いものではなく、新たな知識が増えていくという点で本来楽しい行為であると考えている。「分かる」ことは、学びの楽しさの根源であるという思いから、「分かりやすさ」を重視し、学生が学ぶ喜びを実感できる授業を目指している。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

先述の教育理念を実現するため、大学生として備えておくべき知識や技術など、食品分野の基礎的素養を授業や実習を通して身につけさせることを重視している。卒業後に食品分野へ進む学生はもちろんのこと、食品分野に進まない学生にとっても、「食」は生きる上で欠かせないものである。そのため、大学での学びがそれぞれの学生の血となり肉となり、卒業後も頭の片隅に残り、何らかの形で活かされることを願っている。

その実現のために、できる限り入門的な知識から導入し、「誰にでも分かる」水準を出発点として、徐々に専門的内容へと段階的に発展させている。最終的には、当該科目について大学生として求められる素養を身につけた上で単位を取得できるよう、14回の授業を体系的に構成している。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

座学については、一方通行の授業とならないよう、必ず学生自身が考える時間を設けることを心掛けている。授業後半には当該回の内容を振り返る確認問題に取り組む時間を設け、毎回、答え合わせと解説を行っている。さらに、その問題を翌週の小テストとして出題することで、スモールステップによる知識の確認と定着が図れるよう工夫している。

実習については、実験結果をレポートとして提出させるだけでなく、スライド作成課題も課している。実験では手を動かすことが重要である一方、得られたデータを正確に整理し、結果を適切に示し、そこから考察を導き出す力も同様に不可欠である。また、それらを他者に分かりやすく発信する力も重要である。そのため、レポート作成やスライドプレゼンテーションの作成についても、授業内で丁寧に指導・支援することを意識している。

(2) ICTの教育活用

有

AzaMoodleやGoogleドライブなどのICTツールを積極的に活用し、授業を実施している。新型コロナウイルス禍の収束に伴い、現在は対面授業を中心とした形式に戻っているが、2020～2021年度の遠隔授業において好評であったオンデマンド教材の繰り返し視聴や、実習動画の制作・提供については、現在も継続している。特に実習科目では、実験前に事前動画を視聴できる機会を設けており、これが学生の理解促進に寄与していると考えられる。今後もICT教育の有効な側面を取り入れつつ、より効果的な授業運営を行っていきたい。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

「できるだけ分かりやすく」を常に心掛けて授業を実施している。そのため、スライド資料や教材についても、文字情報を過度に詰め込むのではなく、写真やイメージ図を多用し、直感的に理解できる構成となるよう選択・作成している。また、活用可能な動画・映像教材については積極的に授業内で取り入れ、視覚や聴覚に訴えることで印象に残る学習となるよう工夫している。

(2) 学生の理解度の把握

B

ほぼ毎回、授業の冒頭に小テストを実施し、学生の理解度を確認している。また、全14回の授業の中間時点には中間テストを行っている。これらの評価を通じて、成績上位・中位・下位の学生の状況を把握するとともに、個別に指導が必要な学生を早期に見極めることが可能となっている。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

座学においては、小テストを課すことで、自宅学習や授業前の復習に取り組みやすい環境づくりを行っている。また、授業評価アンケートにおいても、小テストがあることで復習しやすいとの意見が寄せられており、学習習慣の定着に一定の効果があると考えられる。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

日頃の授業では、全体への講義や声掛けが中心となり、個々の学生と十分にコミュニケーションを取る時間を確保することが難しい。そのため、小テストの末尾にコメント欄を設け、学生が自由に質問や意見を記入できるようにしている。また、実習ではグループごとの進捗状況を把握しながら、各工程の区切りごとに確認の時間を設けるなど、教員と学生が意思疎通しやすい環境を整えるよう努めている。

(5) 双方向授業への工夫

B

集団授業においては、できるだけ一方通行にならないよう、適宜アンケート形式で挙手を求めるなどの工夫を行っている。また、授業内容によっては学生自身がプレゼンテーションを行う機会を設けるなど、能動的に授業へ参加できる環境づくりを心掛けている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

該当なし

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

授業評価において好評であった点は継続し、不評であった点については改善を図っている。例えば、「分かりやすい」というコメントについては、学生が内容を十分に理解できているものと捉え、当該単元の難易度は維持している。また、最終回の授業では、アンケートに「分かりやすかった単元」と「分かりにくかった単元」を具体的に記載してもらうよう依頼している。その結果、難しいと感じられた箇所については、次年度に説明をより丁寧にする、時間配分を見直す、難易度を調整するなど、授業改善に反映させている。実習についても、興味深いと感じた実習とそうでなかった実習をアンケートで把握し、進め方に関する具体的な改善点があれば、次年度のシラバスや実習内容に可能な範囲で反映している。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

実習の進め方や事前・事後学習の在り方について継続的に改善を重ねてきた結果、教員と学生間の認識の齟齬が減少し、授業評価は年々向上している。近年では、満足度の高いコメントを多く得られるようになってきていると感じている。こうした改善・向上の成果の一つとして、「食物アレルギー論（2019年度）」および「食品学実習（2021年度）」においてグッドティーチング賞を受賞した。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

学生に好評であった点については、その要因を意識しながら、次年度の授業運営に積極的に活かしていきたい。また、改善が必要とされた点についても、可能なものから速やかに見直しを行い、授業の質向上に努めていきたい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

授業の終わりには、その回の学習内容を確認するまとめ問題に取り組み、模範解答を解説することで、当日の内容を簡潔に振り返る時間を設けている。翌週の授業冒頭では、前週のまとめ問題と同一内容の問題を用いて小テストを実施している。このように毎週少しずつ復習を重ねることで、知識の定着を図っている。また、小テストの採点は教員自身が行っており、学生がどの内容をどの程度理解できているかを把握している。誤答が多かった問題については、改めて丁寧に解説するなど、状況に応じた対応を行っている。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

授業評価アンケートにおいては、「小テストによって復習の機会が確保できたことが良かった」との評価を得ている。また、実習では、各学生から提出されたプレゼンテーションスライドを無記名で共有し、受講者全員が相互評価を行った上で、ベストプレゼンテーションを投票により選出する試みを実施した。評価する立場を経験できたことが新鮮であったとの声や、上位に選ばれた学生からは、他者からのコメントが自信につながったとの感想が寄せられた。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

可能な限りFD研究会には参加するよう努めている。やむを得ず予定が重なる場合や、遅い時間帯に実施されるFD研究会については、当日参加が難しいこともあるが、後日配信される映像を視聴することで内容を把握し、自己研鑽に活かしている。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

短期的な目標

- ・ 授業担当科目の履修学生について、まずは顔と名前を一致させることから取り組む。
- ・ 個々の学生の理解度を的確に把握するよう努める。
- ・ 学習の停滞や意欲低下が見られる学生に対して、早期に支援・フォローを行う。

長期的な目標

- ・ 成績上位・中位・下位の各層に応じてアプローチを柔軟に工夫し、授業および研究活動への意欲を引き出し、それを持続させる教育を目指す。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

授業評価アンケート、シラバス